

県育成品種ふさこがねのさらなる消費と生産拡大に向けた取組

～第1回「千葉ふさこがねコンテスト」in そうさ～

1 課題の目的

匝瑳市でそうさの米研究会が、「匝瑳の舞」として県育成品種「ふさこがね」を用いた唯一の地域ブランド米を生産・販売を開始してから、はや10年が経過した。これまで当研究会では、消費者を招いた田植え体験や商談会への参加、海外への輸出の検討など販路拡大に向けた様々な取組を行ってきた。新たな販売促進の取組として「千葉ふさこがねコンテスト」を開催することで、ふさこがねの知名度と消費向上、生産者の生産意欲向上を図ることをねらいとした。

2 課題の背景

- (1) 米・食味分析鑑定コンクールなど様々な食味コンテストが全国・県内で開催されている。その多くが「コシヒカリ」を中心としたもので、県育成品種「ふさこがね」に特化した食味コンテストは開催されていない。
- (2) 「匝瑳の舞」のブランド力向上と消費拡大のためには、その使用品種である「ふさこがね」の品種の良さを再PRし、知名度を上げる取組が必要である。
- (3) 「匝瑳」の読み仮名及び地名は全国的に知名度も低く、匝瑳市を会場として食味コンテストを開催し情報発信をしていくことで、「ふさこがね」のPRと合わせ、「匝瑳(そうさ)」という地名もPRし地域ブランド米のより一層の推進を図ることが必要であった。

3 普及活動の経過

- (1) 「千葉ふさこがねコンテスト実行委員会」への組織化を誘導し、関係機関と連携した取組を推進した。そうさの米研究会、匝瑳市、JAちばみどり、農業事務所により協議を重ね実行委員会を8月に組織した。
- (2) 県全体の生産面積拡大を視野に「ふさこがね」を生産している県内の農業者を対象に出品募集を行った。募集に関わる広報や周知方法については、実行委員会を中心に役割分担を行い、匝瑳市、JAちばみどり、農業事務所が協力し、海匝地域、県内全域へ募集をかけた。
- (3) 予選、決勝大会の実施に関わる支援体制の構築では、JAちばみどり、(株)石川商会の協力により食味計による予選(一次審査)を行い、(有)まきの代表の牧野氏(五ツ星お米マイスター)の協力のもと決勝大会(最終審査)を行った。

審査員長を農林総合研究センター水田利用研究室の室長に依頼し、16名の審査員による厳正な審査を行った。

4 普及(調査)活動で得られた成果

- (1) 出品募集の周知と広報活動は、関係者で役割分担を明確にしたことで、県内8市町（匝瑳市、旭市、佐倉市、山武市、いすみ市、南房総市、大多喜町、九十九里町）の農業者から27点の応募があった。
- (2) 県内の米穀販売業者6社を決勝大会の審査員として招き、「ふさこがね」の特徴である見た目と冷めてもおいしいことが再確認され、今後の消費拡大に手応えを感じた。そして、コンテスト終了後、入賞者の「ふさこがね」を筆頭に新たな取引に結びつくなどコンテストという新たな手法で県内の米穀販売業者への「ふさこがね」のPRが実現した。
- (3) 地域の話題としてローカルTV、新聞（地域、米業界）、業界紙等の様々なメディアで取り上げられたことで、キーワードである「ふさこがね」「匝瑳市」のPRにつなげることができた。

5 問題点と今後の展開方向

今年度は、募集開始が8月下旬となり、「ふさこがね」の収穫時期の直前となり十分な周知という点では課題が残った。今後継続していく場合、4月下旬の作付時点からの募集を開始する。

募集から一次審査、最終審査に至るまでの運営では、かなりの時間と労力を要するため、実行委員会をさらに円滑かつ効率的に機能させるとともに、関係機関の協力体制を一層強めることで消費・生産拡大を図っていく。

「ふさこがねコンテスト」を一層盛況な取組に育てることと合わせ、「匝瑳の舞」の食味・品質の向上を進めることが大切である。「ふさこがね」と「匝瑳の舞」がともにブランド力を高めていくことで、地域稲作の活力となることが期待される。



審査を待つ炊き上がったごはん



香りを確認する審査員

(匝瑳グループ 宮田 昌明)